

●株主メモ

事業年度

4月1日～翌年3月31日

期末配当金受領株主確定日

3月31日

中間配当金受領株主確定日

9月30日

※当社の配当金受領方法は、ゆうちょ銀行の「配当金額収証」によるお支払いのほか、銀行預金口座またはゆうちょ銀行貯金口座への振込を選択できます。

定時株主総会

毎年6月

単元株式数

100株

単元未満株式の買取・買増請求

単元未満株式の買取請求・買増請求の手続きは株主名簿管理人へお申し出願います。(ほふりをご利用の単元未満株式については、お取引先の金融商品取引業者(証券会社)でお手続きください。)

公告掲載URL

<http://www.daiichisankyo.co.jp/>

当社の公告は電子公告により行います。但し事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。

上場取引所

東京証券取引所・大阪証券取引所・名古屋証券取引所 各第1部

株主名簿管理人

三菱UFJ信託銀行株式会社

同連絡先

三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
〒137-8081 東京都江東区東砂
七丁目10番11号

電話 0120-232-711 (通話料無料)

同取次所

三菱UFJ信託銀行株式会社 全国各支店
野村證券株式会社 全国本支店

株券電子化に関するお知らせ

正式には政令により、実施日が決定されますが、経済界・金融界としては、「2009年1月」を実施目標として株券電子化の準備を進めております。

株券をお手元(自宅・貸金庫等)にお持ちの場合は、お早めに金融商品取引業者(証券会社)を通じて「ほふり」へお預けいただくことをおすすめいたします。

IRメールマガジンにぜひご登録を!

当社では、最新のIR情報を株主・投資家の皆様へ直接メールでお届けしています。当社をよりご理解いただくためにも、ぜひともご登録ください。

URL:

<http://www.daiichisankyo.co.jp/mail/index.html>



お問合せ先

株式に関するお問合せは、下記株主名簿管理人までお願いいたします。

フリーダイヤル **0120-232-711**

なお、株式に関するお手続き用紙(届出住所・印鑑・姓名等の変更届、配当金振込指定書、単元未満株式買取・買増請求書、名義書換請求書等)のご請求につきましては、次の三菱UFJ信託銀行の電話及びインターネットでも24時間承っております。

フリーダイヤル **0120-244-479** (証券代行部)

0120-684-479 (大阪証券代行部)

インターネットアドレス

<http://www.tr.mufig.jp/daikou/>

「株券等の保管振替制度」をご利用の株主様は、お取引口座のある金融商品取引業者(証券会社)にご照会ください。

第一三共株式会社

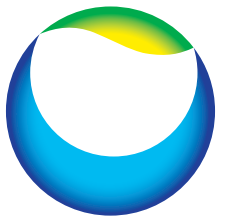
〒103-8426 東京都中央区日本橋本町三丁目5番1号

<http://www.daiichisankyo.co.jp/>

〈お問合せ先〉コーポレートコミュニケーション部 TEL.03-6225-1126 FAX.03-6225-1132



株主通信は、環境に優しい大豆油インキを使用して印刷しています。



Daiichi-Sankyo

株主・投資家の
皆様へ

第一三共株式会社

革新的医薬品を継続的に創出し、提供することで、
世界中の人々の健康で豊かな生活に貢献する。

医療技術の進歩や人類が生み出してきた医薬品は、多くの人々の命を救い、健康的な生活に貢献しています。しかし、未だに治療満足度が不十分であったり、治療法の確立されていない多くの疾病が存在し、これら疾病に対する治療、予防、さらには一人ひとりの特性に応じた治療が求められています。医療の一翼を担う製薬企業は、社会からこれらの課題を解決することを期待され、私たちはそれに応えることを使命としています。第一三共の企業理念は、革新的医薬品—ファーストインクラス/ベストインクラス—を創出し、提供することにより、人々の健康で豊かな生活に貢献することです。企業理念、すなわち私たちの存在意義を果たすため、第一三共グループは、高い使命感を持ち、惜しみない努力を傾注して、社会の期待に応えます。

2015年ビジョン

Global Pharma Innovatorの実現

2015年に「世界の主要地域に拠点を構えて自ら事業を展開し(Global)、革新的医薬品を継続して創出・提供する創薬型企業(Pharma Innovator)」となること

計数目標

売上高

1兆5,000億円

営業利益率

25%以上

海外売上比率

60%以上

研究開発における重点疾患領域

「血栓症」「糖尿病」「癌」「自己免疫疾患/関節リウマチ」各領域でグローバルトップクラスのパイプライン構築

第1期中期経営計画 (2007~2009年度) 成長基盤拡充期間

2015年ビジョン達成に向け、成長軌道を確立すべくグローバルレベルで収益性を高めるための基盤づくりを行ってまいります。

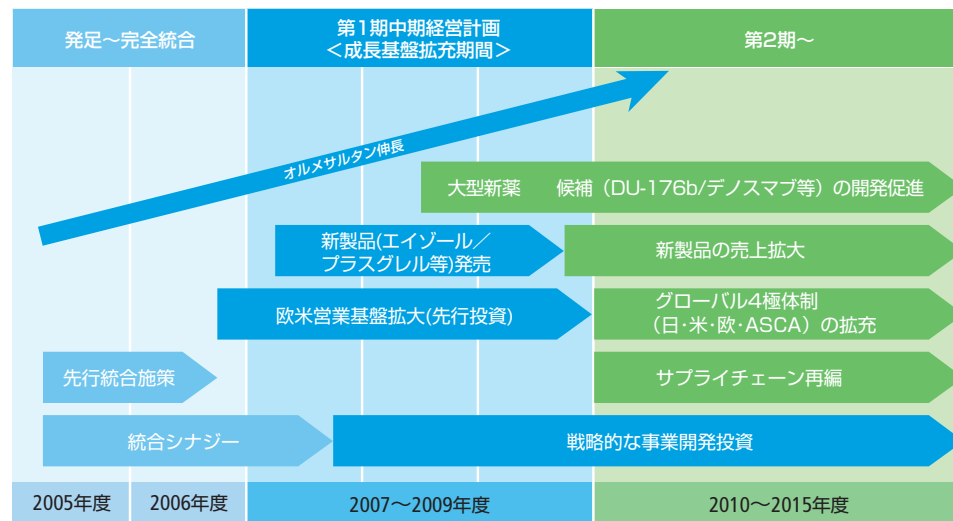
2009年度目標数値

売上高
9,600億円
営業利益率
25%
海外売上比率
40%以上

重点施策

- 経営統合によるシナジーの最大化
 - 新薬創出力強化、研究開発パイプラインの充実
 - 主力製品の維持、拡大
 - 業務効率の向上
 - 国内営業体制の構築
- 米国における営業力の拡大
- 戦略的投資による事業拡大

2015年ビジョン達成までのプロセス



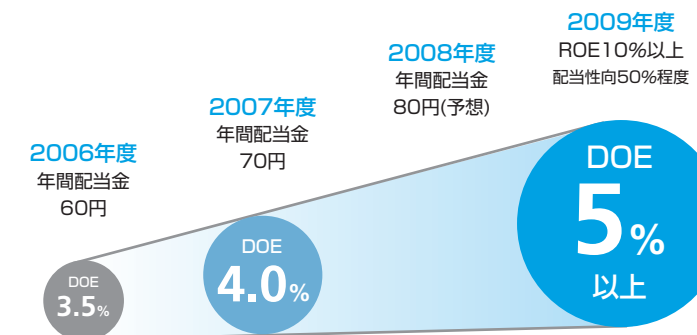
ビジョン達成

積極的な株主還元

当社は、株主還元を重要な経営課題の1つと捉え、積極的に取り組んでいます。2007~2009年度の中期経営計画期間中の当期純利益相当額は、配当と自己株式取得により、すべて株主還元に充当する方針であり、「総還元性向100%」を目標としています。

「総還元性向」目標：100%

- 中期方針(2007~2009年度)
- 総還元性向100%=当期純利益相当額を株主還元で充当
- DOE5%の早期達成を目指し、安定的に配当を増額
- 自己株式取得は取締役会決議により機動的に実施



DOE(純資産配当率)とは?

株主の皆様からお預かりした資本に対して、企業がどの程度の配当をお支払いしているかを表す指標です。DOE=配当性向×ROEで算出されます。

つくっているのは、希望です。



私たちは、人間をこよなく愛する製薬会社です。人間といういのちの輝き、いのちのすこやかさを愛し、そのためになることなら、どんな努力も惜しまない製薬会社です。私たちは、どこよりも先進の集団でありたいと思います。すぐれた研究力と開発力をみがき、つくれなかった薬をつくり、治せなかった病を治す。そのことに限りなく貢献できる会社になろうと思います。私たちは、どこよりも誠実な集団でありたいとも思います。医薬品づくりは、いのちにかかわる仕事。そのことを胸深く刻みつつ、誰からも、心から頼られるパートナーでありたいと思うのです。人間の、かけがえのない一日一日をしっかりと守ること。思いがけなく待ち受ける病に、すばやく立ち向かうこと。私たち第一三共がつくっているものは、医薬品であると同時に、すべてのいのちをまばゆく照らす「希望」だと思ふのです。



目次

第一三共の企業理念／ビジョン／中期経営計画.....P1~2

コーポレートスローガン／ごあいさつP3~4

特集：第一三共の強み

「世界トップレベルの研究開発力」.....P5~9

開発パイプラインについてP10

連結決算の状況／次期の見通しP11~12

連結財務諸表の概要をご報告しますP13~14

Zoom Up.....P15~18

第一三共のCSRへの取り組み.....P19

コンプライアンス最優先の企業を目指してP20

企業インフォメーションP21~22

○ごあいさつ

株主の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

新生・第一三共グループがスタートし、第1期中期経営計画の初年度であった2007年度は、統合シナジーの創出、高血圧症治療剤オルメサルタンをはじめとする主力品の売上拡大、抗血小板剤プラスグレルの承認申請など2015年ビジョンで掲げる「Global Pharma Innovatorの実現」に向けた「最初の一步」を、まずは順調に、かつ力強く踏み出すことができたと思っております。

2007年度の業績につきましては、完全統合後の新たな体制による国内販売力のさらなる強化と海外事業基盤の拡充を図りました結果、売上高は8,801億円(前期比5.3%減)となりました。非医薬品事業のグループ外自立化、海外子会社の決算期変更といった特殊要因を除く医薬品事業では実質的には増収となっております。また、経営統合によるコストシナジーなどにより、営業利益は1,568億円(前期比15.0%増)、経常利益は1,690億円(前期比11.2%増)、当期純利益は976億円(前期比24.3%増)となりました。

医薬品ビジネスを取り巻く環境は、日本における薬価改定や後発品使用促進策、世界各国での医療費抑制策の進展など、ますます厳しくなっております。

このような環境下、グローバル4極(日・米・欧・アジア他)の営業力をさらに強化し、主力品の処方拡大と新製品の発売により売上拡大を図ってまいります。2008年度の売上高につきましては、2007年度の非医薬品事業の売上高320億円および欧州子会社の決算期変更の影響分141億円が減少することもあり、8,400億円(前期比4.6%減)

を見込んでおります(非医薬品事業および子会社決算期変更の影響を除く医薬品事業売上高では前期比0.7%増)。利益面では、減収に加え、米国でのプラスグレル発売に向けた販売促進費や営業担当者増強などの先行投資、経口抗Xa剤DU-176bをはじめとする主要開発プロジェクトのステージ進捗に伴う投資拡大を予定していることから、営業利益1,300億円(前期比17.1%減)、経常利益1,380億円(前期比18.4%減)、当期純利益800億円(前期比18.1%減)とそれぞれ減益を見込んでおります。

このようなグローバル営業体制の強化や積極的な研究開発投資は、2009年度以降の大幅な業績拡大に繋げていくために必要不可欠であると考えておりますので、2007年度以上にテンポを上げてこれら諸課題に挑戦してまいります。

株主様への還元につきましては、中期経営計画でお示した通り、3か年を通しての当期純利益相当額を、配当または自己株式取得に充当する「総還元性向」100%を目標と

してまいります。配当につきましては、安定的・継続的に増額していくという方針に則り、2008年度は減益予想ではあるものの、1株当たり10円増配し、年間80円の配当を予定しております。さらに、2007年度に自己株式取得を1,000万株実施した結果、総還元性向が85%程度になったことから、2008年度には、2007年度との通算で総還元性向が100%を上回るよう、タイミングを捉えた自己株式取得を機動的に行なってまいります。

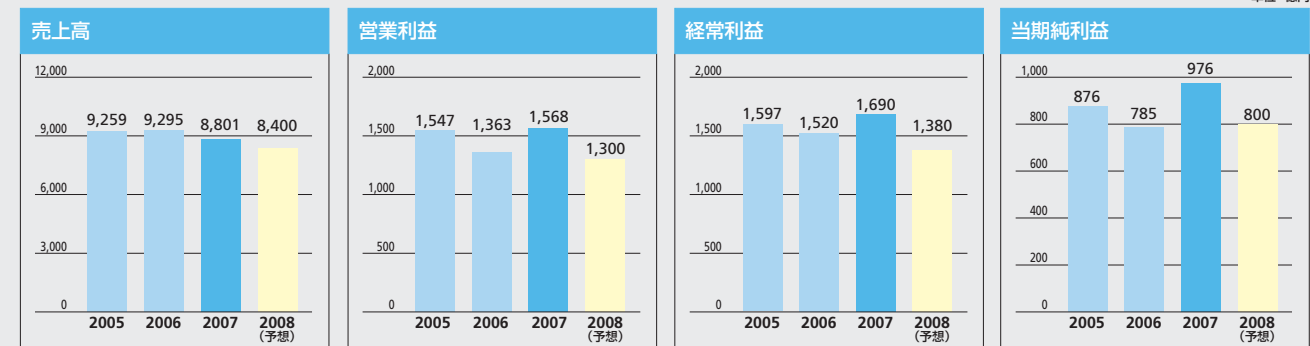
引き続き株主・投資家の皆様のご支援をお願い申し上げます。



代表取締役社長兼CEO

庄田 隆

●連結財務ハイライト



特集：第一三共の強み「世界トップレベルの研究開発力」

“グローバル創薬型企業 (Global Pharma Innovator)” を経営ビジョンに掲げている当社の最大の強みは世界トップレベルをも狙える研究開発力にあります。ここでは、常務執行役員研究開発本部長の廣川和憲と研究開発の最高意思決定会議体であるGEMRAD (ジェムラッド) 議長のジョンC.アレキサンダーのインタビューを通じて、当社の研究開発力の強みや注目すべきプロジェクトの状況などを中心にご紹介します。

>>> 第一三共の研究開発力 >>>

Q 医薬品の研究開発とはどのようなものですか？
また、第一三共の研究開発の特徴は何ですか？

廣川：医薬品の研究開発が他の業界と大きく異なるところは、やはり1つの新薬を世に送り出すには、10～15年、時には20年にも及ぶ長い時間を費やすということでしょう。

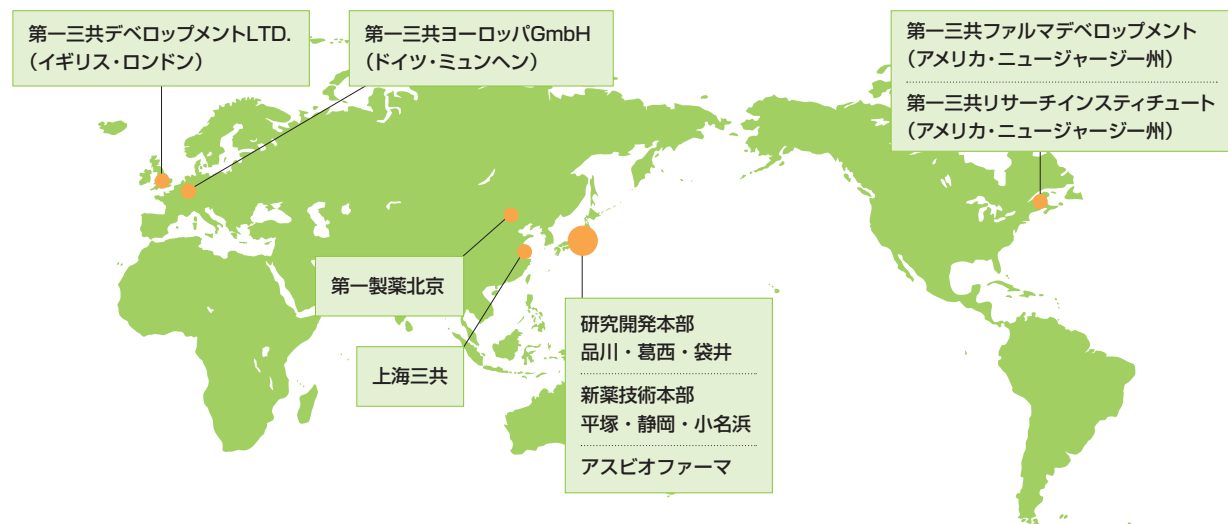
そこで当社グループでは、一日でも早く世界の医療現場に、世界中の患者さんに画期的な新薬をお届けするため、日本・アメリカ・ヨーロッパ、3つの拠点を軸に、質の高い研究開発を、

よりスピーディーに進められる体制を構築しています。日本の研究所 (品川・葛西等) で見出した薬の種を、日米欧のグローバル開発拠点 (日本、アメリカ (第一三共ファルマデベロップメント)、ヨーロッパ (第一三共デベロップメントLTD.)) で育て、グローバル市場で開花させることを目指しております。(図1参照)



研究開発本部長 廣川和憲

図1 グローバル研究開発拠点



Q 「GEMRAD」と呼ばれる会議体では何を行って
いるのですか？

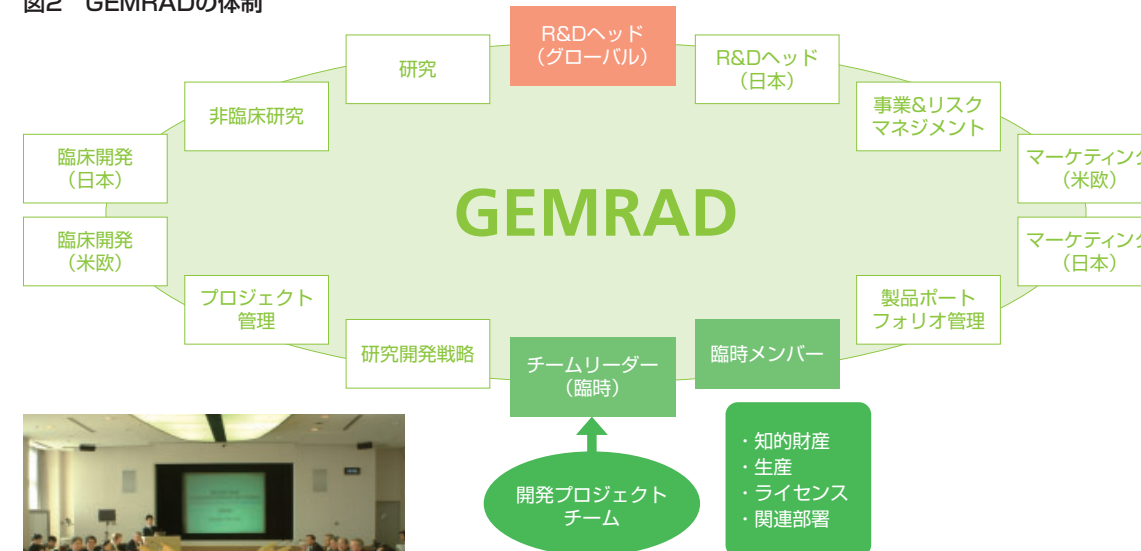
アレキサンダー：私が議長を務めている「GEMRAD」は「Global Executive Meeting of Research and Development」の略で、グループ全体の機能や地域の枠組みを越えた、当社独自の会議体で、研究開発プロジェクトに関する意思決定を行う最高機関です。具体的には、研究開発パイプライン (*10ページ参照) の優先度評価をはじめとする重要な意思決定や研究開発の予算配分などを行い、グローバル研究開発プロジェクトの進捗管理を担当しています。会議に参加するメンバーも、研究開発部門にとどまらず、国内外の営業部門、ライセンス部門、

製品ポートフォリオを担当する部門など、幅広い部門の代表によって構成されています。(図2参照) 特に個々の研究開発プロジェクトを、節目節目でGO/NO-GO (進めるか中止するか) の意思決定をスピーディーに行っていくことは、新薬を創出するプロセスにおいて非常に重要です。



GEMRAD議長 ジョンC.アレキサンダー

図2 GEMRADの体制



「GEMRAD」風景

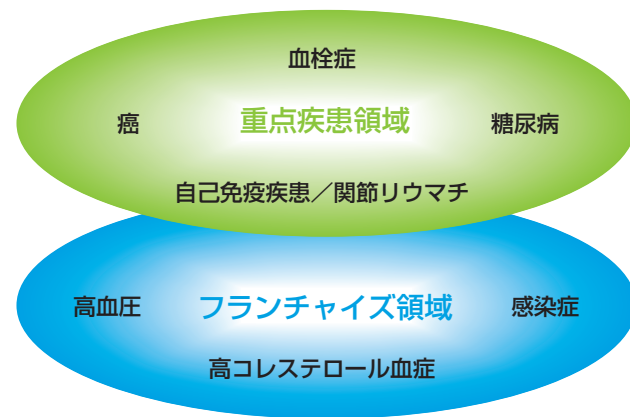
特集：第一三共の強み「世界トップレベルの研究開発力」

Q 研究開発には様々な分野がありますが、第一三共はどのような分野を中心に取り組んでいますか？

廣川：世界には未だに医療満足度が不十分であったり、治療法が確立されていない多くの疾病が存在します。当社では、アンメットニーズ(未充足の医療ニーズ)の高い「血栓症」、「糖尿病」、「癌」、「自己免疫疾患／関節リウマチ」の4領域を重点疾患領域と定め、最先端の科学・技術によって、画期的な治療効果と高い安全性を有する新製品の創出を目指しています。

また、当社のグローバル製品(オルメサルタン、レボフロキサシン、プラバスタチン)を含む優れた治療薬が存在し、相対的に医療満足度が高くなっている「高血圧」、「感染症」、「高コレステロール血症」の3領域はフランチャイズ領域とし、配合剤の開発や剤形追加などによるライフサイクルマネジメントを進め、より使いやすく、個々の患者さんのニーズに応えられる製品を今後も創出していきます。(図3参照)

図3 研究開発における重点疾患領域



Q 第一三共の最大の強みは、「研究開発力」と言われていますが。

廣川：経営統合前の三共と第一製薬は、それぞれ約100年の歴史の中で、研究開発力をベースに、例えば高コレステロール血症、感染症、高血圧などの分野で、世界に通用する画期的な医薬品を数多く生み出してきました。統合によって、当社の研究開発の基盤はさらに強化され、研究者のエネルギーの融合が相乗効果を生み出し、たえまない新薬の創出につながるものと考えています。

アレキサンダー：統合においては、研究開発領域が重なっていることが重要なポイントです。両者とも強弱こそ異なりますが、ほぼ同様の領域を重点的に取り組んでいましたので、質・量の両面で研究開発を強化することができます。GEMRADが発足し、今年の10月で3年になりますが、メンバーの情熱に満ちた活発で建設的な議論をみていると、あらためて当社の研究開発力の強さを確信します。



>>> 注目すべき開発プロジェクト「プラスグレル」「DU-176b」「デノスマブ」
抗血小板剤「プラスグレル」>>>

Q プラスグレルとはどのような新薬(候補)ですか？

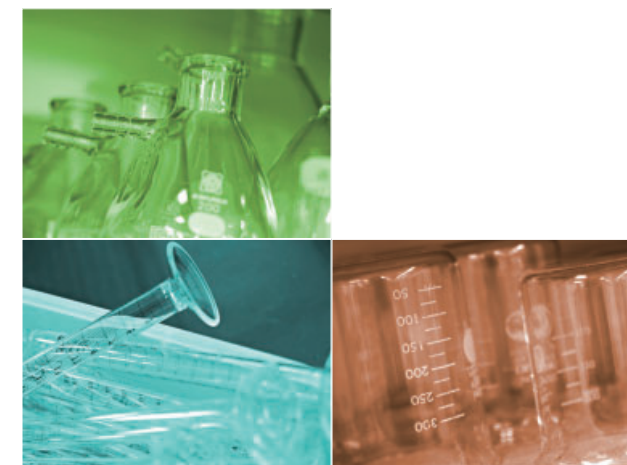
アレキサンダー：プラスグレルは、抗血小板剤と言われる薬です。

血管内で血小板が凝集するのを抑制し、血管を詰まらせる原因となる血栓が形成されるのを防ぐことにより、心臓・血管系の病気のリスクを下げる効果が期待されている新薬です。狭心症や心筋梗塞など、心臓・血管系の病気の発症件数は、年々増える傾向にありますが、血管内で血栓が形成されることにより、血流が妨げられ、酸素が心臓の細胞に送られなくなることにより起きる病気です。

Q 現在の開発の状況はいかがですか？

アレキサンダー：2007年11月に、世界で最も権威あるアメリカ心臓病協会(AHA)の学術集会において、プラスグレルのフェーズ3試験の結果が発表されました。この試験は、経皮冠動脈インターベンション治療(PCI)を必要とする急性冠症候群(ACS)の患者を対象とした大規模臨床試験ですが、プラスグレルは、同じ抗血小板剤で現在の標準治療薬となっている薬剤よりも臨床的有用性が優れるという結果が確認されました。

この試験結果を踏まえ、2007年12月にアメリカ、2008年2月にヨーロッパにおいて新薬承認の申請を行いました。



なお、日本ではフェーズ2試験を実施しています。

また、効能追加を目指して、近く新たな試験を開始する予定です。この試験は、PCI治療を受けていない、いわゆる薬物治療を受けているACS患者が対象となりますが、先の試験と同様にプラスグレルの優れた有用性が示されることを期待しています。その場合には、プラスグレルが使われる患者さんの範囲が大幅に拡大されることとなります。

特集：第一三共の強み「世界トップレベルの研究開発力」

>>> 経口抗Xa剤「DU-176b」と抗RANKL抗体「デノスマブ」>>>

Q DU-176bはどのような新薬(候補)ですか？

廣川: DU-176bは、血液凝固に関与する因子の中で非常に重要とされる第10因子(X因子)を抑制し、血栓が形成されるのを防ぎます。

プラスグレル(抗血小板剤)と同様に血栓治療のための薬剤ですが、抗血小板剤が動脈系の血栓、具体的には心筋梗塞や脳梗塞などに主として作用するのに対し、DU-176b(経口抗Xa剤)は、静脈系の血栓、血液の流れが遅くなったときに起こる血栓症によく作用することが期待されます。例えば「エコノミークラス症候群」は、足を曲げて長く座ることで足の血管(静脈)で血液の流れが悪くなって血栓が発生し、それが肺に飛んで肺の血管を詰まらせ、機能が著しく損なわれる症状とされています(深部静脈血栓症による肺血栓塞栓症)。また、心臓に不整脈がおき、血液の流れが悪くなったときにできた血栓が血液循環とともに脳に飛んでおきるのが脳塞栓症(心房細動による血栓塞栓症)。

これまで実施してきたフェーズ2試験までの各試験において非常に期待できる結果が出ており、他社との開発競争が激しい抗Xa剤の領域において、ベストインクラスの製品を目指しております。この夏以降に、世界各国において大規模なフェーズ3試験を開始する予定にしており、プラスグレルに次ぐ大型新薬の候補として育てていきたいと考えております。

Q 他社からデノスマブという新薬(候補)を導入したと聞きましたが。

廣川: 研究開発では、自社品だけでなく他社の新薬(候補)を導入して開発していくことも大変重要です。その意味では、2007年7月に、米国のアムジェン社から期待の大きい骨粗鬆症治療剤デノスマブを導入することができました。

骨は生涯を通じて、弾力や固さを失った古い骨が分解される骨吸収と、新しく骨がつくられる骨形成を繰り返しており、そのバランスで骨量が決まりますので、骨粗鬆症の治療薬としては、骨形成を促進する薬剤か骨吸収を抑制する薬剤かが使用されるのが一般的です。デノスマブは、通常の生理的な骨吸収のメカニズムや骨代謝調整において非常に重要な役割を果たしているRANK-RANKL系のRANKLに特異的に結合する抗体であり、骨吸収を抑制するメカニズムを持ちます。

骨粗鬆症の患者さんに大きな希望をもたらす新薬候補と考えており、2008年度中には、日本で骨粗鬆症のフェーズ3試験を開始する予定です。すでに癌の骨転移を抑制する効能を目指してフェーズ3国際共同試験を行っております。

動画で分かりやすく解説!

当社ホームページの「第一三共ハイライト」では、今回取り上げました研究開発をはじめとした当社の旬なニュースを動画で配信しています。ぜひ一度ご覧ください。

http://www.daiichisankyo.co.jp/ds_highlight/index.html



開発パイプラインについて (2008年5月現在)

第一三共は、継続的な成長の源泉となる研究開発について、循環器、糖代謝、感染症、癌、免疫・アレルギー、骨・関節の6疾患領域を中心に、以下のプロジェクトを推進しております。

	主な既存品	フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3	申請/承認
循環器	Mevalotin Benicar/Olmetec Azor Welchol オルメテック カルブロック アーチスト メパロチン クレメジン ハンフ、リパロ、 サンリズム、ペプリコール	DB-772d (米/欧) (経口抗Xa剤) CS-8080 (米/欧) (動脈硬化性疾患治療薬)	DU-176b (米/欧/日) (経口抗Xa剤) ☆CS-866CMB(日) (オルメサルタンとヒドロクロロチアジドの配合剤) CS-747 (日) (プラスグレル/抗血小板剤)	☆CS-866DM(日) (オルメサルタン メドキシミル 糖尿病性腎症) ☆CS-866AZ (日) (オルメサルタン メドキシミルと アゼルニジピン配合剤) ☆CS-8635(米) (オルメサルタン メドキシミル、 ベシル酸アムロジピン、 ヒドロクロロチアジドの配合剤)	CS-747 (米/欧) (プラスグレル/抗血小板剤) ☆CS-8663 (欧) (オルメサルタン メドキシミル とベシル酸アムロジピンの 配合剤)
糖代謝	ファステック	AJD101 (米/欧) (インスリンシグナル経路活性化)	CS-011(日) (グリタゾン系) AJD101(日) (インスリンシグナル経路活性化)	CS-011 (米/欧) (リボグリタゾン/インスリン抵抗性 改善剤)	
感染症	Levaquin/Tavanic Banan クラビット	CS-8958 (米/欧) (抗インフルエンザ/ビオタ社と共同開発)	CS-8958 (日) (抗インフルエンザ)	☆レボフロキサシン注 (日) (ニューキノロン剤)	DU-6859a oral (日) (グレースビット/ニューキノ ロン剤/経口/承認) ☆レボフロキサシン高用量 (日) (ニューキノロン酸)
癌	トボテシ クレステン	CS-7017 (米)(PPARγ作動薬) DE-766 (日)(ニモズマブ/抗EGFR抗体)	CS-1008 (米) (抗DR5抗体)		
免疫・アレルギー	ジルテック	CS-0777 (米/欧) (免疫抑制剤) SUN13834 (米) (キマーズ阻害剤)			
骨・関節	ロキソニンブランド モービック			AMG162 (日) (デノスマブ/抗RANKL抗体/ P3:癌骨転移、P2:骨粗鬆症) ☆CS-600G (日) (ロキソプロフェン ナトリウム/ゲル製剤)	☆LX-P (日) (ロキソニンテープ/承認/ リードケミカル(株)と 共同開発)
その他	Venofer Evoxac オムニパーク オムニスキャン フェロン ユリーフ		SUN11031 (日) (ヒトグレリン/神経性食欲不振症) SUN11031 (米/欧) (ヒトグレリン/カヘキシア)	SUN Y7017 (日) (メマンチン塩酸塩/軽度・中等度および 高度アルツハイマー型認知症) KMD-3213 (中国) (シロドシン/排尿障害治療剤)	☆DL-8234 (日) (フェロン)効能/C型慢性肝炎/ リハビリ併用療法) ☆SUN 0588r (米/日) (ビオプテリン効能/テトラヒドロ ピオプテリン反応性高フェニ ルアラニン血症)

☆効能追加、剤形追加等

ご参考

フェーズ1

少数の健康人を対象とした安全性、薬物の吸収、分布、代謝、排泄等を検討する試験。

フェーズ2

対象疾患の少数の患者において安全性を最重点にシフト、用法、用量の検討、有効性を検討する試験。

フェーズ3

拡大臨床試験といわれ、数百から数千人の患者を対象に有効性と安全性の確認が行われ、有効性を確認する試験。

申請/承認・上市

有用性が確認されたものだけが新薬の製造販売承認の申請がなされます。

連結決算の状況／次期の見通し

決算(連結)の状況

売上高 **8,801億円** (前期比 **5.3%** 減)
 営業利益 **1,568億円** (前期比 **15.0%** 増)
 経常利益 **1,690億円** (前期比 **11.2%** 増)
 当期純利益 **976億円** (前期比 **24.3%** 増)

■業績全般の概況

- 売上高は8,801億円(前期比5.3%減)となりました。非医薬品事業のグループ外自立化や海外子会社の決算期変更の特殊要因で減収となりましたが、グローバル製品を中心に世界4極で自社販売力は着実に強化されており、特殊要因を除く実質的な比較では増収となっています。
- 経営統合によるコストシナジーが顕在化し、営業利益は1,568億円(前期比15.0%増)、経常利益は1,690億円(前期比11.2%増)と増益になりました。当期純利益は、2006年度に、非医薬品事業の売却益等の特別利益を大きく上回る事業統合関連等の特別損失が計上されていたこともあり、976億円(前期比24.3%増)の大幅増益となりました。

■国内医療用医薬品事業

- 競合激化により高コレステロール血症治療剤メバロチン、造影剤オムニパークなどが減少したものの、高血圧症治療



オルメテック



クラビット



キュリーフ

剤オルメテック、アーチスト、カルブロック、合成抗菌剤クラビット、排尿障害改善剤ユリーフ、消炎鎮痛剤ロキソニンブランドなどがそれぞれの市場の伸長を上回り拡大したため、売上高は4,373億円(前期比0.9%増)となりました。

■海外医療用医薬品事業

- 北米の売上高は1,779億円(前期比7.1%減)となりました。2006年度に米国子会社2社の決算期変更で15か月分が計上され減収となりましたが、高血圧症治療剤ベニカー、エイゾール、2型糖尿病に効能追加となった高コレステロール血症治療剤エルコールなどの伸長により実質的には180億円の増収となっております。
- 欧州では、高血圧症治療剤オルメテックの伸長などにより子会社の第一三共ヨーロッパGmbHの業績が拡大し、売上高は779億円(前期比46.1%増)となりました。同社は12月決算から3月決算へ決算期変更を行っております。



エイゾール



オルメテック/オルメテックプラス
(ヨーロッパ)

- アジア諸国や中南米は、高血圧症治療剤オルメサルタン、合成抗菌剤レボフロキサシンの成長が業績を牽引し、売上高は210億円となりました。なお、子会社の第一三共ブラジルLTDAと第一三共ベネズエラS.A.が連結対象となりました。



レボフロキサシン(原薬)

- 輸出およびロイヤリティ収入は、合成抗菌剤レボフロキサシンが継続拡大していますが、特許期間が満了した高コレステロール血症治療剤プラバスタチンの原末輸出は減少し、売上高は755億円(前期比10.4%減)となりました。

■ヘルスケア事業

- 医薬品として初めて「しみ(肝斑に限る)」の効能効果を取得したトランシーノが2007年9月の発売以来順調に売上げを伸ばした他、外用消炎鎮痛薬パテックスブランドにおいてフェルピナクシリーズを新たに発売したことなどにより、売上高は503億円(前期比4.9%増)となりました。



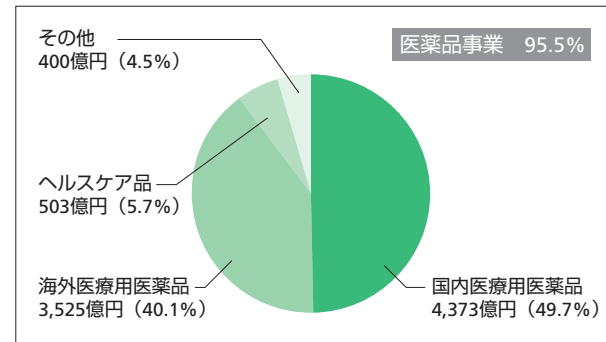
トランシーノ

パテックス
フェルピナク35

■その他事業

- 当社グループは、経営資源を医薬品事業へ集中させるため、非医薬品事業のグループ外自立化を進めているため、その他事業(国内)の売上高は349億円(前期比65.8%減)となりました。

事業別売上高構成比(当期)



次期の見通し

売上高 **8,400億円** (前期比 **4.6%** 減)
 営業利益 **1,300億円** (前期比 **17.1%** 減)
 経常利益 **1,380億円** (前期比 **18.4%** 減)
 当期純利益 **800億円** (前期比 **18.1%** 減)

- 売上高は、2007年度にグループ外自立化を進めた非医薬品事業の売上高320億円と欧州子会社の決算期変更の影響分141億円の計461億円が減少し、8,400億円(前期比4.6%減)を見込んでおります。上記461億円を除外して売上高を比較すると、対前年60億円、0.7%の増収となります。また、為替レートは1ドル100円、1ユーロ155円を前提としており、2007年度の実勢レートと比較すると約340億円の減収要因となっています。
- 利益は、米国でのプラスグレル(予定商品名:エフィエント)発売に向けた先行投資、DU-176bをはじめとする開発プロジェクトの投資拡大を予定していることから、営業利益1,300億円(前期比17.1%減)、経常利益1,380億円(前期比18.4%減)、当期純利益800億円(前期比18.1%減)とそれぞれ減益を見込んでおります。



<http://www.daiichisankyo.co.jp/ir/index.html>

当社ホームページでも、決算情報をはじめ、株主・投資家の皆様向けの様々な情報をご覧いただけます。

連結財務諸表の概要をご報告します

連結貸借対照表 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当期 (2008年3月31日現在)	前期 (2007年3月31日現在)
● 資産の部		
流動資産	926,524	1,015,840
現金及び預金	47,335	232,614
受取手形及び売掛金	166,980	197,158
有価証券	526,805	388,896
たな卸資産	98,158	107,758
その他	87,538	90,137
貸倒引当金	△293	△724
固定資産	561,364	620,994
有形固定資産	221,266	248,857
無形固定資産	91,070	60,153
投資その他の資産	249,028	311,983
投資有価証券	216,038	262,240
その他	33,341	50,164
貸倒引当金	△352	△421
資産合計	1,487,888	1,636,835

科目/期別	(百万円)	
	当期 (2008年3月31日現在)	前期 (2007年3月31日現在)
● 負債の部		
流動負債	194,514	281,510
支払手形及び買掛金	46,405	56,435
短期借入金	68	8,560
未払法人税等	18,682	27,573
その他	129,358	188,940
固定負債	48,862	83,176
長期借入金	18	1,533
繰延税金負債	26,724	36,145
退職給付引当金	6,781	35,062
その他	15,338	10,435
負債合計	243,376	364,687
● 純資産の部		
株主資本	1,211,600	1,191,346
資本金	50,000	50,000
資本剰余金	179,863	179,860
利益剰余金	1,025,144	971,483
自己株式	△43,407	△9,997
評価・換算差額等	32,276	77,310
その他有価証券評価差額金	48,539	72,358
為替換算調整勘定	△16,263	4,951
新株予約権	257	—
少数株主持分	377	3,491
純資産合計	1,244,512	1,272,148
負債・純資産合計	1,487,888	1,636,835

連結損益計算書 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当期 自 2007年4月1日 至 2008年3月31日	前期 自 2006年4月1日 至 2007年3月31日
売上高	880,120	929,506
売上原価	234,570	265,200
売上総利益	645,549	664,306
販売費及び一般管理費	488,722	527,992
営業利益	156,827	136,313
営業外収益	16,983	20,001
営業外費用	4,752	4,228
経常利益	169,058	152,086
特別利益	16,140	73,492
特別損失	18,342	98,666
税金等調整前当期純利益	166,856	126,912
法人税、住民税及び事業税	52,355	64,710
法人税等調整額	16,740	△16,631
少数株主利益	99	283
当期純利益	97,660	78,549

連結キャッシュ・フロー計算書 (要旨)

科目/期別	(百万円)	
	当期 自 2007年4月1日 至 2008年3月31日	前期 自 2006年4月1日 至 2007年3月31日
営業活動によるキャッシュ・フロー	66,667	106,429
投資活動によるキャッシュ・フロー	△49,437	45,305
財務活動によるキャッシュ・フロー	△82,898	△40,768
現金及び現金同等物に係る換算差額	△4,738	399
現金及び現金同等物の増減額	△70,406	111,365
現金及び現金同等物の期首残高	513,211	400,967
連結範囲の変更による増加額	501	877
非連結子会社との合併に伴う増加額	1,028	—
現金及び現金同等物の期末残高	444,334	513,211

連結株主資本等変動計算書 (要旨) 当期(自 2007年4月1日 至 2008年3月31日)

	株主資本					評価・換算差額等			新株 予約権	少数株主 持分	純資産 合計
	資本金	資本 剰余金	利益 剰余金	自己株式	株主資本 合計	その他有価 証券評価 差額金	為替換算 調整勘定	評価・換算 差額等 合計			
2007年3月31日残高	50,000	179,860	971,483	△9,997	1,191,346	72,358	4,951	77,310	—	3,491	1,272,148
連結会計年度中の変動額											
剰余金の配当			△47,034		△47,034						△47,034
当期純利益			97,660		97,660						97,660
自己株式の取得				△33,419	△33,419						△33,419
自己株式の処分				9	12						12
連結子会社の新規連結に伴う剰余金増加高			141		141						141
非連結子会社との合併に伴う剰余金増加高			2,893		2,893						2,893
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額(純額)					—	△23,818	△21,215	△45,033	257	△3,113	△47,889
連結会計年度中の変動額合計	—	2	53,661	△33,410	20,254	△23,818	△21,215	△45,033	257	△3,113	△27,635
2008年3月31日残高	50,000	179,863	1,025,144	△43,407	1,211,600	48,539	△16,263	32,276	257	377	1,244,512

「どんな薬か」だけでなく、「どこの薬か」を考えたことがありますか。

～新・企業テレビCM「どこの薬か」篇をオンエア～

2008年3月より、当社の企業テレビCMの第3弾として、「どこの薬か」篇を積極的に展開しています。抜群の知名度を誇る俳優 渡哲也さんを起用し、より多くの皆様にまずは会社名を知ってもらい、さらには医療用医薬品を研究・開発し、販売している会社であることを伝えています。

今回は、「患者さん代表」として渡哲也さんに出演いただいています。

薬剤師さんからわたされた薬のパッケージの裏側をみて、「おっ、第一三共」と微笑む渡さん。

皆様も、普段薬を飲むとき、「どこの薬か」つまりどの製薬会社の薬かはほとんど意識されないかもしれません。

でも、当社は皆様の健康のために日々新薬の研究開発に取り組んでおり、皆様の身近にいますよというメッセージを込めています。

薬を手にした患者さんに健康になってもらいたいという当社の願いを表現しました。



Message — 渡哲也さんからメッセージをいただきました。



こんにちは、渡哲也でございます。
 今回、第一三共さんの企業広告のお手伝いをさせていただいております。
 私が以前大病をいたしました折、お医者さんの診断により的確な、そして適正な薬を処方され、完治し現在にいたっております。
 この時に、改めて薬の力、薬の大事さを実感いたしました。
 世の中には、未だに薬が存在しない病気が圧倒的に多いそうです。
 また新しい薬を開発することには、長い年月がかかり、挑戦・失敗の連続だと聞いております。
 第一三共の皆さんは「革新的医薬品で世界の人々の健康で豊かな生活に貢献する」という理念のもと一丸となって頑張っておられます。
 私も第一三共さんのこの熱い思いを一人でも多くの方々に届けることが出来ま
 すよう頑張ってみます。
 第一三共さんを応援してください。

●新聞や雑誌にも展開しています。



●当社のホームページでも、テレビCMはもちろん、渡さんのメッセージを生の声で視聴いただけます。



<http://www.daiichisankyo.co.jp/cmspecial/index.html>

～つくれなかったクスリをつくりたい。治せなかった病を治したい。～
当社の思いが込められた、新製品を紹介いたします。

<医療用医薬品>

●合成抗菌剤「グレースビット®錠50mg・細粒10%」 (発売日：2008年6月2日)



当社最主力品「クラビット®」と同じニューキノロン系の経口抗菌薬で、強い抗菌力とブドウ球菌、肺炎球菌など22菌種にも及ぶ広範囲の菌種に効果があり、適応菌

種による重症例、再発再燃例、他剤耐性菌による感染が疑われる症例に対しても優れた臨床効果が期待できます。クラビット®に加えて、感染症治療においてさらに貢献できると確信しています。

<ヘルスケア品>

●解熱鎮痛剤「サリドン® Wi (ダブルアイ)」 (発売日：2008年4月14日)

効果の高い解熱鎮痛成分として知られている「イソプロピルアンチピリン」と「イブプロフェン」を日本で初めて同時に配合した解熱鎮痛薬。2つの解熱鎮痛成分のうち、「イソプロピルアンチピリン」は中枢に作用して痛み・発熱を抑え、また、「イブプロフェン」は末梢に作用して痛みの原因物質の発生を抑え、優れた効果を発揮します。

サリドンは1954年の発売から長年多くのお客様にご支持いただいている解熱鎮痛剤ブランドです。



●経皮吸収型鎮痛・抗炎症剤「ロキソニン®テープ50mg・100mg」(発売：2008年7月予定)



当社とリードケミカル株式会社が共同開発した日本初のロキソプロフェンナトリウム水和物含有のテープ剤。1日1回の貼付で優れた鎮痛・抗炎症効果が期待で

きます。トップブランドとして、長きに亘り使い続けられている当社のロキソニンブランドにおきまして、2006年のパップ剤に引き続き、新たな剤型が追加され、これまで以上に鎮痛・抗炎症治療へ貢献できると確信しています。

●ドリンク剤「リゲイン24エグゼクティブ」 (発売日：2008年3月25日)



「24時間戦えますか。」のRegainは、今年で20周年。現在ではドリンクタイプは医薬品・医薬部外品あわせて10品目ラインナップされていますが、共通する成分として第一三共ヘルスケアオリジナルのビタミンB1誘導体「ピオタミン」を配合しています。

20周年目に新発売した「リゲイン24エグゼクティブ」はボトルに「山の頂を目指すビジネスマン」をデザインしたユニークなパッケージで、「エグゼクティブ」級の疲れに！オススメの1本です。

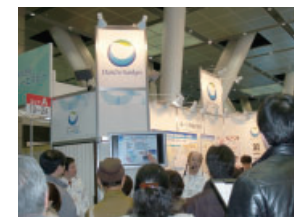
個人投資家の皆様との直接対話活動を積極的に展開しています。

当社は株主の皆様をはじめ、一般投資家の皆様との関係を強化すべく、投資家向けコミュニケーション（IR）活動を展開しています。具体的には、この株主通信、ホームページ個人投資家向け専用サイト、IRメールマガジンなどを用意していますが、その他に、皆様と直接お会いして、当社の事業活動をお伝えする活動をより積極的に展開しています。

2007年度は、ノムラ資産管理フェアへの出展、大和IRコンファレンス、野村証券店舗での企業説明会、名古屋証券取引所企業研究セミナーを通じて、合計で1万人を超える株主・投資家の皆様と直接対話することができ、皆様からもたくさんの激励を頂戴いたしました。（右図参照）

今年度も昨年度以上の機会を設けて積極的に活動を行ってまいりますので、お近くにお住まいの方は、ぜひ一度、足をお運びください。

なお、具体的なスケジュールなどにつきましては、IRメールマガジンや個人投資家向け専用サイトでお知らせいたします。



ノムラ資産管理フェアでは、東京で約4,700名、大阪で約6,500名の株主・投資家の皆様に出展ブースにお立ち寄りいただきました。

大和IRコンファレンス（東京・帝国ホテル）では、個人投資家の皆様向けのイベントで初めて代表取締役社長の庄田隆が説明を行いました。



●2007年度活動実績

2007年	5月28日	名古屋証券取引所企業研究セミナー（ホテル名古屋ガーデンパレス）
	11月14日	野村証券支店セミナー（金沢支店）
	11月20日	野村証券支店セミナー（東京・荻窪支店）
	11月22日	野村証券支店セミナー（埼玉・浦和支店）
	11月30日 ～12月1日	ノムラ資産管理フェア（東京国際フォーラム）
	12月9日	大和IRコンファレンス（名古屋・ミッドランドスクエア）
	12月15日	大和IRコンファレンス（大阪・シティプラザ大阪）
2008年	1月21日	大和IRコンファレンス（東京・帝国ホテル）
	2月6日	野村証券支店セミナー（奈良・学園前支店）
	2月7日	野村証券支店セミナー（神戸支店）
	2月15日～16日	関西ノムラ資産管理フェア（京セラドーム）
	2月28日	野村証券支店セミナー（高松支店）
	2月29日	野村証券支店セミナー（福山支店）

個人投資家向け専用サイトの「個人投資家向け説明会スケジュール」に随時スケジュールなどをお知らせします。

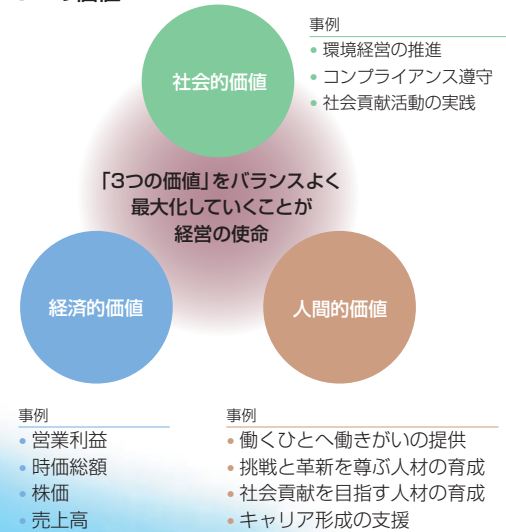


<http://www.daiichisankyo.co.jp/ir/individual/schedule/index.html>

社会の一員として 第一三共のCSRへの取り組み

当社グループは、CSR(Corporate Social Responsibility =企業の社会的責任)を経営の重要課題と位置づけ、高い倫理観と社会的良識を持ち「経済的価値」のみならず「社会的価値」、「人間的価値」(以上「3つの価値」(図1参照))との調和が取れた企業価値の向上を重視しております。

図1 3つの価値



そして当社のCSR活動をステークホルダーの皆様幅広く認知していただくことを目的として、2008年4月からホームページに「CSRサイト」を開設しております。



<http://www.daiichisankyo.co.jp/csr/index.html>

トップインタビュー、特集「あなたの健康で豊かな生活のために」をはじめとして、当社のCSRに対する姿勢や実際に行っている取り組みなどを詳細にお伝えしています。



クリック募金「希望のふうせん」にご協力ください

<http://www.daiichisankyo.co.jp/csr/clickdonation/index.html>



CSRサイトに、社会貢献活動として皆様が自主的に参加できる「クリック募金「希望のふうせん」」を設置しました。支援したい団体(*)を選んでクリックしていただくと、ワンクリック毎に1円の募金ができます。一日ワンクリックしかできませんが、翌日以降は再び募金ができます。最終的に募金総額相当の寄付を皆様に代わって当社が行います。2008年4月より1年間を予定しています。寄付の実施状況も随時見ることができます。

支援するNPO団体
 * WWF ジャパン: 地球環境の保全支援
 * 世界の医療団: 世界の医療支援
 * プラン・ジャパン: 途上国の子どもへの教育支援



ぜひボランティア活動の一環として、クリック募金にご協力をお願いします。

社会の一員として コンプライアンス最優先の企業を目指して

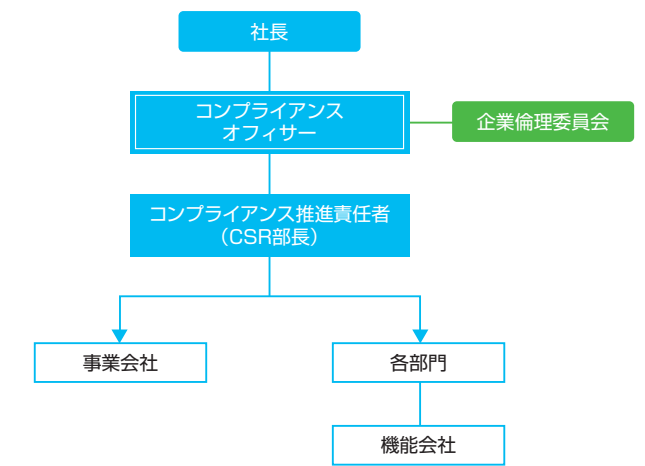
当社は、生命関連企業として、国内外のグループ会社を含めたすべての企業活動において、法令を遵守し、高い倫理観をもって行動するコンプライアンス経営を推進しており、役員をはじめ全従業員は、自らの行動をさらに厳しく律し、企業の社会的責任を積極的に果たすため、チャレンジ精神と創意工夫をもって取り組んでいます。

ここでは、当社のコンプライアンス推進体制や具体的な取り組みをご紹介します。

●コンプライアンス推進体制

- 社長もしくは社長が指名した者がコンプライアンスオフィサーとなり、コンプライアンス・プログラムを統括します。
- コンプライアンスオフィサーは企業倫理委員会の委員長を務めます。企業倫理委員会では、年次プログラム実施計画の承認、実施報告の検証、コンプライアンス違反があった場合の再発防止策の決定などを行います。
- CSR部長は推進責任者として、プログラムの推進、年次プログラム実施計画の立案および実施報告、コンプライアンス教育を進めます。

当社グループのコンプライアンス推進体制図



●コンプライアンス・プログラムの展開

企業理念や企業行動憲章などに基づき、コンプライアンス・プログラムを実行しています。

また、各部門においては、自律的に教育・研修活動を行い、コンプライアンスの浸透を図っています。



コンプライアンス・ガイドブック (社内研修教材)

●コンプライアンス研修の実施

役員および従業員、その他の就業者がコンプライアンス遵守の重要性を十分に認識するために、階層別にコンプライアンス研修を実施しています。また、e-ラーニングを実施して、コンプライアンスの理解度の確認を定期的に行っています。



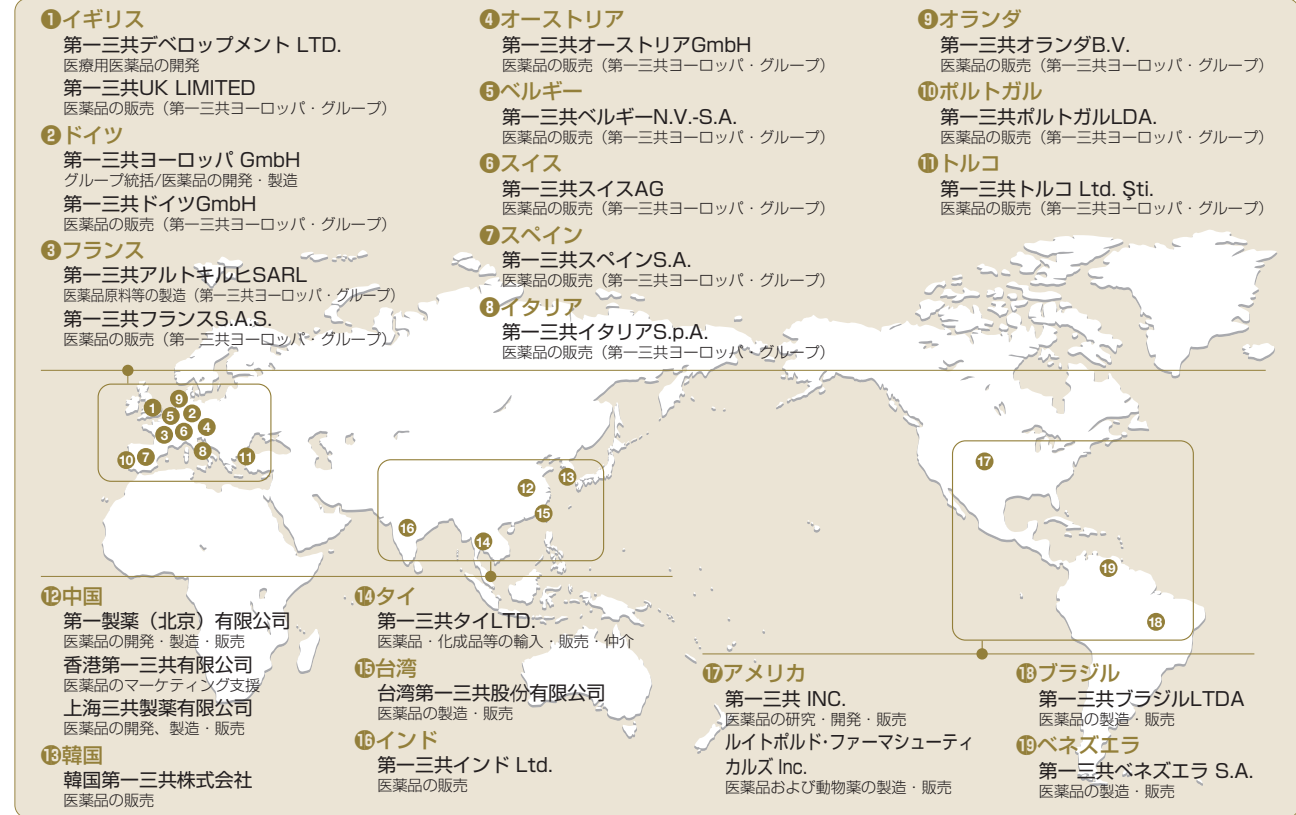
コンプライアンス社内研修風景

企業インフォメーション

●事業所

本社：東京都中央区日本橋本町三丁目5番1号
 主要な国内事業拠点（第一三共グループ）
 支店：札幌、東北（宮城県）、東京、千葉、埼玉、横浜、
 北関東（東京都）、甲信越（東京都）、東海（愛知県）、
 京都、北陸（石川県）、大阪、神戸、中国（広島県）、
 四国（香川県）、九州（福岡県）
 ※上記の他、全国主要都市に営業所を設けております。
 研究所：品川（東京都）、葛西（東京都）、平塚（神奈川県）、
 袋井（静岡県）、群馬、大阪
 工場：秋田、小名浜（福島県）、平塚（神奈川県）、
 小田原（神奈川県）、静岡、大阪、高槻（大阪府）

●海外グループ企業



●主要な国内グループ会社

会社名	主要な事業内容
第一三共プロファーマ株式会社	医薬品の製造
第一三共RDアソシエ株式会社	グループの研究開発サポート業務
第一三共ビジネスアソシエ株式会社	グループのビジネスサポート業務
第一三共ハピネス株式会社	グループのビジネスサポート業務
第一三共ロジスティクス株式会社	物流および関連業務
第一三共ケミカルファーマ株式会社	医薬品の原体および中間体等の製造等
第一三共ヘルスケア株式会社	ヘルスケア品の開発・製造・販売
アスピオファーマ株式会社	医薬品の研究開発・製造・販売

●商号

第一三共株式会社
 (DAIICHI SANKYO COMPANY, LIMITED)

●資本金

500億円

●事業内容

医療用医薬品の研究開発、製造、販売等

●従業員数

約15,000名（第一三共グループ）

●役員（2008年6月27日現在）

代表取締役会長 森田 清
 代表取締役社長 庄田 隆
 取締役 尾崎 昭雄
 取締役 高田 龍三
 取締役 松田 等
 取締役 采 孟
 社外取締役 仁平 園雄
 社外取締役 西川 善文
 社外取締役 矢部丈太郎
 社外取締役 沖本 隆史
 常勤監査役 高柳 輝夫
 常勤監査役 永田 光
 社外監査役 島田 馨
 社外監査役 樋口 公啓

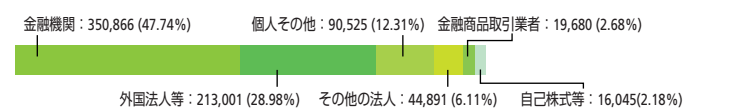
●株式の状況（2008年3月31日現在）

発行可能株式総数	2,800,000,000株
発行済株式の総数	735,011,343株 (自己株式16,043,319株を含む)
株主数	66,210名

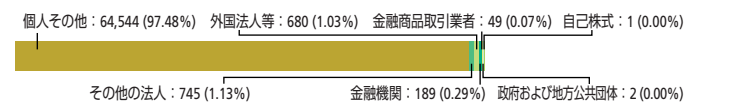
●大株主

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	67,313,300	9.16
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	43,855,200	5.83
日本生命保険相互会社	41,839,182	5.69
ザチエスマンハットンバンクNAロンドンSLオムニバスアカウント	19,139,654	2.60
ジェービーモルガンチエースバンク380055	19,110,300	2.60
株式会社三井住友銀行	13,413,368	1.82
株式会社三菱東京UFJ銀行	9,468,983	1.29
東京海上日動火災保険株式会社	9,328,109	1.27
野村證券株式会社	9,162,838	1.25
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	8,626,300	1.17
合計	241,257,234	32.82

●所有株式数別分布（千株）



●株主数別分布（名）



●株価の推移（月足）

